

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實
広島平和文化センター会長



平和記念式典で「平和への誓い」を読み上げるこども代表（写真提供 広島市）

目次

写真「平和記念式典で『平和への誓い』を読み上げるこども代表」	1	被爆体験記「戦争を知らないあなたへ」（脇舛友子）	5
被爆78年 平和記念式典	2	第11回NPT再検討会議に平和首長会議代表団を派遣	6
ヒロシマ青少年平和の集い／ 「伝える HIROSHIMA プロジェクト」(広島市教育委員会)	3	「原爆の絵」9点が新たに完成	7
ひろしま子ども平和の集い／姉妹都市提携40周年「ハノーバーの日」	4	本財団会員の皆様へ／「原爆の絵」心に焼きついて離れない命／ ヒロシマ・メッセンジャー募集	8



被爆78年 平和記念式典

被爆から78年目の8月6日（日）、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）が行われ、被爆者や遺族、来賓などおよそ5万人が犠牲者の冥福と世界恒久平和を祈りました。

式典は午前8時に始まり、最初に松井一實^{まつい かずみ}広島市長と遺族代表2人が、この1年間に亡くなられたことが確認された5,320人の氏名が記帳された2冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は339,227人、名簿総数は125冊となりました。

続いて母谷龍典^{もたに たつり}広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された8時15分に、遺族代表の角田礼奈^{すみだ れな}さんと、こども代表の田中湊都^{たなかみさと}さんが平和の鐘をつき、参列者全員が1分間の黙禱^{もくとう ささげ}を捧げました。

この後、松井市長が平和宣言を行いました。始めに、当時8歳だった被爆者の「核兵器保有国の指導者に広島、長崎を訪れて被爆の実相



平和宣言を読み上げる松井市長

を知ってほしい。」という訴えを紹介しました。続いて、「今年5月のG7広島サミットで、各国首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話を経て記帳された芳名録は、被爆者の願いが各国首脳の心に届いていることの証しになると思う。」「原爆死没者慰霊碑を参拝された各国首脳に直接伝えた碑文に込められた『ヒロシマの心』は、各国首脳の心に深く刻まれていると思う。」と述べました。

そして、各国の為政者に、「核による威嚇を行う為政者がいるという現実を踏まえ、核抑止論は破綻しているということを直視し、私たちが厳しい現実から理想へと導くための具体的な取組を早急に始める必要がある。」と訴えました。その上で、G7広島サミットに訪れた各国首脳に続き、広島を訪れて平和への思いを発信し、核による威嚇を直ちに停止し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けて一歩を踏み出すことを強く求めました。

また、市民に対し、「市民の支持を必要とする為政者が市民と共に平和な世界に向けて行動するよう、世界中に『平和文化』を根付かせる取組を広めていこう。」と呼びかけました。

日本政府に対しては、核保有国と非核保有国との間で現に生じている分断を解消する橋渡し役を果たすことや、第2回核兵器禁止条約締約国会議にオブザーバー

参加することを求めました。さらに、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により様々な苦しみを抱える多くの被爆者の支援策を充実することを強く求めました。

この後の「あいさつ」で、岸田文雄^{きしだ ふみお}内閣総理大臣は、「核軍縮を巡る国際社会の分断の深まりやロシアによる核の威嚇等により、『核兵器のない世界』の実現に向けた道のりは一層厳しいものになっている。今一度、それに向けた国際的な機運を呼び戻すことが重要であり、確固たる歩みを進める上で原点となるのは被爆の実相への正確な理解だ。」との考えを示しました。

そして、G7広島サミットでは、世界のリーダーたちに被爆者の声を聞いていただき、被爆の実相や平和を願う人々の思いに直接触れていただいたことや、若者等による広島、長崎訪問を促したことを紹介し、「国際賢人会議の議論も踏まえながら、『核兵器のない世界』の実現に向け、引き続き積極的に取り組んでいく。」と述べました。

今回の式典ではアントニオ・グテーレス^{あんとにょ ぐてーれす}国連事務総長の「あいさつ」を中満泉^{なかみつしみ}国連事務次長兼軍縮担当上級代表が日本語で代読しました。

事務総長は、「1945年の8月6日に起きた惨劇と、その教訓を世界に伝え続ける被爆者の方々に対し、これからも支援し続けることを改めて誓う。」と述べました。

また、「サミットで広島を訪れた世界の指導者たちは、記念碑を目にし、勇敢な被爆者の方々と語り合い、核軍縮という大義に果敢に取り組んでいく姿勢を見せた。」と評価しつつも、「核戦争勃発の危機を知らせる鐘が再び鳴り響いている今、より多くの指導者たちが真剣に核軍縮に向き合わなくてはならない。」と訴えました。そして、7月末に発表した政策ブリーフ「新たな平和への課題」で、軍縮をその中心に据えたことを紹介し、「核による破滅の脅威がこの世から影も形もなく消え去るまで、私たちの努力は続く。」と述べました。

湯崎英彦^{ゆざき ひでこ}広島県知事は、「持続可能性の観点から、国際社会の一致した目標として核兵器廃絶を目指し、核軍縮を進めていくことが必要だ。」と述べました。

こども代表の勝岡英玲奈^{かつおか えれな}さんと米廣朋留^{よねひろともる}さんは、原爆の惨禍から生き残り命をつないでくれた人々たちへの感謝とともに、「被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。」と、「平和への誓い」を読み上げました。

式典には31道府県の遺族代表の他、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランスを含む111か国と欧州連合（EU）の大使や代表が参列しました。

（総務課）

令和5年度「ヒロシマ青少年平和の集い」を開催しました

8月5日（土）、広島市役所講堂で開催しました。

この集いは、平和学習を主目的とするもので、平和記念式典に派遣された各都市の平和使節団等（中学生が中心）13団体・154人と、中・高校生ピースクラブ27人とが参加し、交流を深めました。中・高校生ピースクラブは本財団が運営しているボランティア組織であり、クラブの皆さんには、被爆の実相を深く学んだうえで、このようなイベントを通じて、平和推進に取り組んでいただいています。

集いは、①被爆の実相に関する平和学習と、②少人数班での討議形式による平和学習の二つのパーツから構成されます。

①では、クラブのメンバーから原爆被害概要を説明した後、証言者の笠岡貞江さんが講話を行いました。各都市の皆さんは非常に積極的であり、笠岡さんに20問を超える質疑がありました。例えば、「当時物資が欠乏する中、衣服はどう調達したのか」、「被爆しなかったら、どのような仕事に就きたかったのか」など、当時の日常生活やその後の人生に関わる質問もあり、皆

さんの理解が具体的になり、深まったと思います。

②では、まず、各都市の参加者を、バラバラに班編成しました。

そして、各班に配置された広島のクラブのメンバーが取りまとめ役を担い、「平和」や「核兵器」をテーマに、活発な意見交換と、発表が行われました。

以上のように、この集いでは、来広する皆さんと被爆者、広島の中高生との人間と人間としての交流が可能です。また、派遣された中学生が各自治体に帰って成果を発表することにより、フィードバック効果も期待できますので、来年度以降さらに充実していきたいと考えています。

（平和記念資料館 啓発課）



活発な意見交換が行われました。

令和5年度 中学生による「伝える HIROSHIMA プロジェクト」

～8月6日に各国駐日大使に加え、平和記念公園を訪れた海外の人々に英語で平和メッセージを発信しました～

広島市では、平和実現への意欲・態度を育成するため、子どもたちが、「被爆の実相」を継承することに加えて、発信することにも力を入れています。

通常、各国の大使等にお会いすることは難しいですが、平和記念式典に参列される機会を捉えて、直接中学生が大使等に英語による平和の発信を行うもので、平和教育として重要な意義を有しています。

今年は、市内32校の中学校から36名のメッセンジャーが選ばれました。そして、被爆者による講話の聴講、グループ演習、留学生との交流など4回の研修を経たうえで、発信当日の8月6日を迎えました。

参加された皆さんは、平和メッセージを伝えるということについて、以下のような様々な体験をすることが出来ました。

【メッセンジャーの感想】

○ 己斐中学校 江口実良さん（3年）

海外の人々に自分の思いを伝えるには、ただ思いを話すのではなくて、相手の住む地域の文化や歴史を知ったうえで改めて自分の伝えたい内容が相手にどう受け止められるのか見直すことが大切だということや、広島に関して私たちが当たり前知っていると思っていたことは他県や海外の方は全然知らなかったので、

もっとたくさんの人に広島や平和に関することを伝えたいと思った。

○ 伴中学校 柴田楓佳さん（3年）

平和メッセージを修正する際には、様々な立場から見て考えるように気をつけました。大使との会話では、笑顔は平和を広げることができ、笑顔で過ごすことはすごく大切だと言うことについて話し合うことが出来ました。このことから、日常生活でも周りをもっと笑顔にできるように、自分から笑顔で平和を広げていきたいです。

○ 東原中学校 八反田智哉さん（3年）

今まではただただ平和になればいいなと思っていましたが、研修で平和の大切さ、戦争の恐ろしさを学んで、平和になってほしいという気持ちが強くなりました。駐日大使の方に対しては、生い立ちや性別、人種に関係なく相手の気持ちになって考えて伝えるように意識しました。

（広島市教育委員会 学校教育課 指導第二課）



駐日大使等へ英語で平和メッセージを発信しました。

（8月6日 リーガロイヤルホテル広島）

令和5年度「ひろしま子ども平和の集い」を開催しました

8月6日（日）、広島国際会議場フェニックスホールで開催しました。

この集いは、平和記念式典参列のために来広した他都市の子どもたちと広島の子もたちとが、共同して平和への思いを発信するもので、全国から約1,200人が参加しました。

最初に、「広島の中・高校生ピースクラブによる原爆被害説明」や「被爆者の梶本淑子さんによる講話」があり、皆で被爆の実相について学びました。

続いて平和の取組について、広島内外の10団体が発表しました。「広島特別支援学校の合唱」に始まり、「ユースピースボランティアの外国人ガイド」、「庚午中学校の『いじめ』をなくす活動」、「石垣市における戦争体験に根差した取組」など、本年も素晴らしい発表が続きました。

最後に、「それぞれの大切な願いが込められた『平和を守る』ための共同メッセージが発出されました。

出席した子どもたちからは、「被爆者の方のお話が胸に響いた。」「平和を自分に関係がある身近なこととして感じられた。」「自分と同じ中学生が様々な平和活動をしているのに驚いた。」「他の地域の子どもたちの考えを知ることができて良かった。」といった声が寄せられています。（平和市民連帯課）



平和への思いの共同発信

8月6日に「ハノーバーの日」記念行事を開催しました

広島市とドイツのハノーバー市は今年、姉妹都市提携40周年の節目の年を迎えました。

1968年、日独文化協定に基づいて青少年交流日本代表団130人が渡独した際、広島国際青少年協会は総主事と広島市の大学生2人を送り出しました。その後も同協会を中心に広島市とハノーバー市の民間レベルの青少年交流が続きました。1972年には初めて広島市長がハノーバー市を訪問して行政間でも人的交流が進み、機運が熟した1983年、姉妹都市提携に至りました。また、ハノーバー市は平和首長会議の副会長都市としても大きな役割を果たしていただいています。

8月の初週、姉妹都市提携40周年を記念して、ハノーバー市からベリット・オーナイ市長を含む21名が広島を訪問しました。国際市民交流課では、この訪問団が8月6日の朝、平和記念式典に参列するのに合わせ、午後、「ハノーバーの日」と題し、節目の年を祝うとともに、広島市民にドイツ文化を体験して身近に感じてもらい、姉妹都市について理解を深めてもらうイベントを開催しました。



賑わうルツェラーゲブースと、ドイツの民族衣装を着た広島国際青少年協会の学生

セレモニー開催前には、ソーセージ、バウムクーヘン、ドイツ直送のパンの試食やワインの試飲、ドイツの電車のペーパークラフトといったドイツ文化体験と、ハノーバー市と関係が深い上田宗箇流のお茶席を、多くの市民が楽しみました。

中でも、ハノーバー市特有の文化「ルツェラーゲ」（一気飲み的一种）の体験コーナーは広島国際青少年協会のメンバーを中心とした約30人の若者が担当して、活気にあふれた企画となりました。また、これまでの両市の青少年交流の歴史をパネルで紹介しました。

さらに記念ステージでは、広島市内の高校生等が世界各国の青少年と意見交換して相互理解を深め、世界平和について共に考える「青少年国際平和未来会議」のメンバーが、5月にハノーバー市を訪れた際の報告を行いました。例年、青少年国際平和未来会議は広島市と姉妹・友好都市で交互に開催して、世界各国から集まる青少年が平和交流していますが、今年は広島市との姉妹都市提携協定書調印日の5月27日に合わせて、ハノーバー市での開催となりました。訪問したメンバーによる報告は、ハノーバー市で培った考えや思いを音楽で表現したエピソード等、次世代の、国境を越える豊かな創造性を感じるものでした。

その他、ヒロシマ・メッセンジャーによるハノーバー市紹介、ドイツにゆかりのある広島の音楽家によるクラシック・コンサート、そして、広島市消防音楽隊17名による豪華な演奏等、盛りだくさんなステージとなりました。来場者は約500人を数えました。

（国際市民交流課）



被爆体験記

戦争を知らないあなたへ

脇舩 友子

本財団被爆体験証言者

脇舩 友子(わきます ともこ)

3歳の時、原爆投下当日に、母とともに戸坂駅から線路沿いに歩いて広島市内へ入った。2022年から広島平和文化センターの被爆体験証言者として活動。

著書：「高齢婆の眩き人生」、「戦争を知らないあなたへ(日英)」、「忘れてないで！ひろしまを(日英)」

1945年8月6日

私は当時3歳でした。この日、母と私は、高田郡吉田町(当時)の母の実家から呉の自宅に帰る予定で、芸備線の向原駅から汽車で広島に向かいました。しかし原子爆弾投下により、戸坂駅で全員降ろされたので、歩いて広島駅(爆心地から約1.9km)に向かいました。

広島駅が近づくにつれ、被爆して避難してくる人たちとすれちがうようになり、その姿を見た私が「オバケ！オバケ！」と泣き叫ぶので、申し訳なくて困惑したと母は後に人に語っていました。

そのうち私が歩かなくなったので、母は自分の服を私にすっぽりかぶせ、おぶって歩きました。私はしっかり目を閉じていたので、よく覚えていませんが、広島駅は壊滅状態でした。

向洋からは汽車が動いていると聞き、線路伝いに向洋駅へ歩き、そこで母に「目を開けていいよ。」と言われました。そこには、フランケンシュタインを



広島駅構内から南東を望む。右手が主待合室で左手側がホーム。この区画は屋根及び2階が崩落している。(1945年11月18日 米軍撮影/平和記念資料館所蔵)

思わせる包帯だらけの人、松葉杖を持った人、着るものが無いのか毛布のようなものを羽織った人…オバケではないが、やはり見るのも怖い光景でした。

やがて日が沈み辺りが暗くなるころ、汽車に乗れたので呉に向かいました。窓からは真赤に空をこがす広島が見えました。

その後も、学童疎開中の姉の心配や、食糧調達のため、私たちは呉と吉田町を何度も行き来しました。

餓死した孤児達

「広島では日が暮れると暗黒の闇夜が続いた。野宿をしても一匹の蚊もいない。生き物が焼き尽くされた広島で、生き残った人々の中に親を失った子ども達がいた。食べるものはなく、一人、二人と息絶えていった。茶毘に付す為に抱き上げた時、餓死した子供の口が開き、中に小さな石が入っていた。」この話は、新聞やラジオがなくても、人から人へと伝えられました。

当時3歳の私も、大人達が「可哀想に、辛かっただろうね。餓死するなんて…」と涙にくれている姿を見ました。お腹が空いて石がお菓子に見えたのかな…何か口に入れることで慰めになったのかな…一人ぼっちで死んでゆくなんで可哀想…。想像した私は、「お母さん、川の水と草を食べれば死ななんですんでしょ、なんで誰も教えてあげなかったんかね、どうして、どうして、」と問いました。いつもなら大人の話に口を出すと叱られるところですが、皆、涙、涙で言葉を失っていました。しばらくしてポツリと言、母が教えてくれました。「広島は焼き尽くされて、一本の草も木もないよ。虫もいないし、食べれるものはなにもないよ。きっと70年は草木も生えんと皆、言っている。草を食べたくても、草もなかったんよ。」と。

知っていますか？放射線

私は昨年4月に平和文化センターの被爆体験証言者として委嘱を受け、それからは、日本全国から平和学習の為に広島を訪れる小中高の生徒さんに私の体験を語っています。

多くの生徒さんは「原子爆弾は単に大型爆弾であり、多くの人の命を一瞬にして奪い、都市に想像を絶する破壊をもたらすものだ。」と解釈していました。しかし私の被爆体験証言で、被爆後十年に及ぶ微熱との闘い、嘔吐・下痢の続く日々、出血しやすく不安な日々、「ロクロ首」と言われた甲状腺の腫れ、それにより心臓機能が低下し苦しい日々、被爆35年後ようやく正常に動き始めた心臓の話…を聞くと、「生き残れた人達は、それで大丈夫」と誤解していました。本当に怖いのは目に見えない放射線だと初めて知りました。」という言葉頂き、放射線の影響の怖さを語る大切さを実感しました。

同時に、もしかして、世界の多くの人達に、放射線の怖さが伝わっていないのではないかと危惧しました。

私達が被爆した1945年当時、広島の人達は放射線の知識が皆無でした。そのため入市被爆による犠牲者を多く出し、被害が拡大しました。被爆者は後遺症に苦しみながら、生きのび、多くの医学的データや被爆体験証言を残しました。それらは世界で活用されているのでしょうか？全てを世界の皆様に、具体的に、誰もが理解できる方法で示し、共有してゆく事が、被爆国の私達の務めだと考えます。

微力ながら、私も全力で務めさせていただきます。

第11回NPT再検討会議に平和首長会議代表団を派遣

平和首長会議は、オーストリア・ウィーン市で開催された第11回NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議第1回準備委員会へ、7月29日（土）～8月4日（金）の日程で、松井一實^{まつい かずみ}会長（広島市長）、鈴木史朗^{すずき しろう}副会長（長崎市長）、香川剛廣^{かがわたけひろ}事務総長（本財団理事長）を含む代表団を派遣し、国連・各国政府関係者等に対して、スピーチや個別の面会を通じて、核兵器のない平和な世界を願うヒロシマの心を伝え、具体的な核軍縮の進展を要請しました。

また、広島県内で平和活動に取り組む高校生を派遣し、平和首長会議ユースフォーラムの開催等を通じて、次代の平和活動を担う青少年の育成を図りました。

第11回NPT再検討会議第1回準備委員会NGOセッションでのスピーチ

松井会長は、G7広島サミットにおいて核保有国を含む各国首脳に「ヒロシマの心」を深く知っていただいたことに触れながら、「今や破綻している核抑止論を



松井会長によるスピーチ

放棄し、核兵器廃絶に向けた具体的な行動を開始する必要があります。」と訴えると同時に、「今回の準備委員会の場で、具体的な核軍縮・不拡散措置を確実に進展させるための大きな一歩を踏み出されることを期待しています。」と述べました。続いて、鈴木副会長は、「被爆の実相を知ることは、核兵器のない世界に向けた出発点であり、世界を変えていく原動力です。核兵器の脅威は、広島、長崎だけの過去の出来事ではなく、地球上に生きるすべての人たちの現在と未来の課題です。」と述べ、「長崎を最後の戦争被爆地に」という言葉でスピーチを締めくくりました。

G7 各国代表との面会

G7のうちフランス、英国、米国、日本の4カ国の代表と面会し、G7広島サミットでは、各国首脳が被爆の実相に直接触れ、芳名録へ記帳されたこと、また、その内容から、世界恒久平和の実現を祈念し、核兵器は二度と使われてはならないとの「ヒロシマの心」を深く知っていただけたことが伝わるものであったと言及した上で、核兵器廃絶に向けて、広島ビジョンに基づいた具体的な行動を要請しました。また、平和首長会議としては、為政者が核兵器廃絶に向けた具体的な行動を行うための後押しをしたいとの考えを伝えるとともに、加盟都市の更なる拡大への協力を要請しました。小笠原一郎^{おがさわらいちろう}軍縮会議日本政府常駐代表に対しては、

核兵器禁止条約の締結を要請するとともに、まずは第2回締約国会議へオブザーバー参加していただきたいと呼び掛けました。

国連関係者等との面会

中満国連事務次長兼軍縮担当上級代表への署名の手交及び面会

松井会長が広島の高校生の活動について紹介した後、高校生代表から中満^{なかつみ}泉^{いづみ}国連事務次長に、「これは一筆一筆、核兵器廃絶を願う気持ちが込められた署名です。」と約4万4千筆分の『核兵器禁止条約』の早期締結を求める署名の目録を手交しました。

中満国連事務次長は、「被爆地広島^{ヒロシマ}の若い世代が核兵器をどう廃絶していくか真剣に考え、街頭に立って署名を集めるという実際の行動に移し、核軍縮にコミットしていることに勇気づけられた。」と述べられるとともに、「若者には、恐れることなく活動を続け、自分たちの声をどんどん上げてほしい。」と激励されました。中満国連事務次長から相互理解や情報発信についてアドバイスを受けた高校生からは、面会后、「多様性を尊重し、意見の異なる相手の話を誠実に聞くことの大切さを実感した。今後、人の心に訴え掛けるような発信に努めたい。」との感想が聞かれました。



中満国連事務次長(中央)と高校生

ウィーナネン第11回NPT再検討会議第1回準備委員会議長との面会

松井会長は、G7広島サミットで各国首脳が被爆の実相に触れたことに言及するとともに、厳しい国際情勢の中で、新たなプロセスの出発点となる今回の準備委員会に対する期待を述べました。

これを受け、ヤルモ・ヴィーナネン議長は、被爆地からの平和のメッセージは、今回の会議に参加する全ての代表団にとって重要なものであると述べられるとともに、核軍縮・不拡散の先に核兵器のない世界があり、核軍縮が進展しない状況を変えなくてはならないとの見解を示されました。

その他、ブラジル、韓国、オーストリア、キリバスからの出席者との意見交換も行いました。

主催行事等

平和首長会議ユースフォーラムの開催

同準備委員会のサイドイベントとして開催した本フォーラムは、立ち見が出る盛況の中、広島及びウィーンの高校生を始めとする世界各国の若者8組が、核兵器



フォーラムでの発表の様子

廃絶と平和な世界の実現に向けて自らが取り組んでいる活動内容を発表し、活動を通じて感じた平和を希求する思いを共有しました。参加者からは、「日本の若者の取組に感銘を受けた。」「ここに集った若者が連帯してネットワークを構築し、共に目標に向かって歩んでいきたい。」といった決意の言葉が聞かれました。

フォーラムの最後には、中満国連事務次長から、「次代を担う強い意志を持つ若者の皆さんには、国際関係や軍縮について深く学び、政府や外交官を突き動かすことができるような効果的な発信をする存在になって

ほしい。」と激励の言葉をいただきました。

フォーラムを終えた広島の高校生からは、「自分たちの活動を知ってもらえたことが嬉しかった。」「いろいろな国の人の話を聞くことができ、新しい刺激になった。」との感想が聞かれました。

平和首長会議役員都市意見交換会の開催

広島市、長崎市、ポルトガル・エヴォラ市、ベルギー・イーペル市、スペイン・グラノラズ市の5つの役員都市が出席し、各都市における取組発表及び活発な意見交換を行いました。

平和首長会議原爆展の開催

同準備委員会の会期中（7月31日～8月11日）、会場内において、会議参加者や国連関係者に、広島・長崎の被爆の実相や核兵器の非人道性、平和首長会議の取組について理解を深めてもらうため、平和首長会議原爆展を開催しました。7月31日には、武井俊輔外務副大臣が原爆展を視察し、松井会長及び鈴木副会長から展示内容の説明を行いました。

（平和首長会議運営課）

「原爆の絵」9点が新たに完成 —高校生たちが被爆体験を絵で表現—

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、同コースの生徒が被爆者と協働して、記憶に深く残っている被爆時の光景を描く、「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

この度、昨年度から5人の被爆者と9人の生徒が制作を進めていた、9点の絵が完成しました。これで平成19年度（2007年度）以来、160人を超える生徒に191点もの貴重な絵を残していただき、「被爆の実相」を伝える貴重な財産となっています。

7月3日（月）、基町高等学校で完成披露会が行われました。5人の被爆者と、絵を制作した9人の生徒を始めとした創造表現コースの生徒のほか、本財団及び基町高等学校関係者が出席しました。

被爆体験証言者の山瀬潤子さんと、3年生の木村光希さんは、「赤子を抱き、腕から血を噴き出しながら『助けてー』と叫んでいる母親」という作品を制作しました。

山瀬さんによると、原爆投下後間もなく、隣に住む薬屋のおばさんが、赤子を抱き、腕から血を噴き出しながら、山瀬さんの自宅の前の道路に出て助けを求めていました。しかし、誰も助ける余裕はなく、近所の人々は皆パニック状態でした。その後、たまたま自宅にいた山瀬さんのお兄さんが止血をしてあげました。

このように叫び続けるおばさんの様子が忘れられず、山瀬さんは、絵の題材とすることを決めたそうです。「後世にも戦争の悲惨さが伝わる絵になった。」と、絵を描いた木村さんに感謝を述べていらっしゃいました。

木村さんは、「叫ぶ表情」、「血の噴き出している様子」、「赤ちゃんを抱えている状態」という3つの要素を表現するのに苦労したそうです。そのため、「自身で叫んでいる表情を何度もつくってイメージを膨らませたり、噴き出している血の勢いや量、色などについて、披露会3日前まで山瀬さんと電話やメールで調整を重ねた。」ということです。また、「絵を見た人に当時の様子をリアルに伝え、心に響く作品に仕上げることを心掛けた。」とおっしゃっていました。

そして、木村さんは、この絵を通じて「少しでも多くの若い世代の人たちに戦争の悲惨さを知ってもらい、当たり前ではない“平和”がいかに幸せなことか、考えるきっかけになってほしい。」と披露会でのスピーチを締めくくりました。

被爆者と生徒のこうした努力により完成した「原爆の絵」は、被爆体験を具体的に理解してもらうために被爆者の講話で活用するほか、絵の貸出や、市民やマスコミ等への画像データの提供なども行い、「被爆の実相」を後世に継承するために、今後とも役立てていきます。

（平和記念資料館 啓発課）



「赤子を抱き、腕から血を噴き出しながら『助けてー』と叫んでいる母親」
制作：木村光希、山瀬潤子

ご支援ありがとうございます

広島平和文化センターの活動を支えていただいている維持会員のみなさま
(敬称略。令和5年8月25日現在)

【個人】

飯田國彦、石河内寛麿、黒石正樹、富田貴子、永田哲也、野嶋俊男、藤井哲伸、山川義亮、渡辺英樹

【団体】

アート印刷(株)、アズビル(株)ビルシステムカンパニー中四国支店、ANAクラウンプラザホテル広島、(株)アンデルセン・パン生活文化研究所、(株)イシゴウチコーポレーション、(株)イズミ、医療法人清泉会一ノ瀬病院、(有)伊藤久芳堂、(株)エディオン、エリザベト音楽大学、(株)オオケン、大之木建設(株)、(株)大本組広島支店、(株)桐原容器工業所、(株)金の星社、(株)小泉本店、金光教広島平和集会実行委員会、(株)ザイエンス、サンケイ(株)、(株)サンケン・エンジニアリング、山陽女子短期大学、(株)シグナル、清水建設(株)広島支店、ジャトー(株)中国営業所、(株)スガノホールディングス、瀬戸内シーライン(株)、ゼネラルスチール(株)、創価学会広島池田平和記念会館、大成建設(株)中国支店、(株)中国新聞社、(株)中国四国博報堂、(株)中国放送、(株)汐文社、(株)テレビ新広島、(株)童心社、トーホー(株)、長沼商事(株)、(株)ユニバーサルポスト、日本通運(株)広島支店、日本電気(株)中国支社、日本放送協会広島拠点放送局、比治山大学・比治山大学短期大学部、(株)広島銀行、広島経済大学(学)石田学園)、広島県教育用品(株)、(一社)広島県歯科医師会、(公財)広島原爆障害対策協議会、広島県平和運動センター、広島交通(株)、(一財)広島国際文化財団、広島市信用組合、広島修道大学、(学)広島女学院、広島信用金庫、広島赤十字・原爆病院、広島テレビ放送(株)、広島バス(株)、(株)広島バスセンター、広島文化学園大学・短期大学、広島平和教育研究所、(株)広島ホームテレビ、(公財)広島YMCA、広印広島青果(株)、(株)福屋、マツダ(株)、三島食品(株)、(株)みづま工房、(株)もみじ銀行、(株)山口銀行広島支店、(株)リーガロイヤルホテル広島、立正佼成会広島教会、菱信工業(株)西部支社

会員は随時募集しております。本財団ホームページをご覧ください、お気軽にお問い合わせください。



維持・賛助会員ページ

「原爆の絵」心に焼きついて離れない命

広島平和記念資料館では、被爆者が当時の情景を思い出して描いた「市民が描いた原爆の絵」約 5,000 枚を所蔵しています。本館「絵筆に込めて」のコーナーでは、その原画を展示しています。劣化を防ぐため、半年ごとに入れ替えを行っており、現在は「心に焼きついて離れない命」をテーマにした作品を展示しています。

右の絵は、爆風で倒壊した校舎の下敷きになった男児をどうしても引き出せず、手を握り励ますことしかできなかった作者の加藤義典さんの体験が描かれています。



助けてあげられなくてごめんなさい
(1945年8月6日10時30分頃/加藤義典作)

猛火が迫る中、身を割かれる思いでその場を後にした加藤さんは、8月6日を迎えるたびにこの光景を思い出し、すまない気持ちと無念さで胸がつまる思いがしたそうです。

この絵を含めた6点を、来年2月12日(月)まで展示します。

(平和記念資料館 学芸課)

ヒロシマ・メッセンジャーを募集!

広島市は海外の6都市と姉妹・友好都市提携を結んでいます。姉妹・友好都市を身近に感じてもらい、都市同士の友好の持つ意味を深く理解してもらうため、市民へ各都市を紹介するなど、交流の推進役となる「ヒロシマ・メッセンジャー」を募集します。

【活動内容】

- ◆ 「姉妹・友好都市の日」記念イベントの企画運営への参画、司会進行
- ◆ 広島市等が行う国際交流・協力に関する行事への参加
- ◆ 学校・公民館等での姉妹・友好都市の広報活動など

【募集要件及び申込方法】

募集要件及び申込書を国際市民交流課ホームページからご確認いただき、9月1日～10月31日までに申込書を提出してください。ご応募お待ちしております!

【応募先】

〒730-0811 広島市中区中島町1番5号 広島国際会議場3階

(公財)広島平和文化センター 国際市民交流課 「ヒロシマ・メッセンジャー」係

TEL (082) 242-8879 / FAX (082) 242-7452

E-mail: internat@pcf.city.hiroshima.jp



メッセンジャー募集ページ